

【タイトル】

即興的コンピュータ音楽における「現代音楽」の意義

The Significance of "Contemporary Music" in Improvisational Computer Music

【発表者】

長嶋洋一 / Yoichi Nagashima

静岡文化芸術大学, メディアアート/Computer Music

【要旨】

70 年ほどの歴史を持つコンピュータ音楽の世界においては、コンピューティングパワーの発展とともに「非実時間的」音楽(打ち込みによる作曲と自動演奏システムによる再生)はその比重が低下し続けており、あらゆる意味で音楽のライブ性が拡張するとともに即興性の意義も拡大している。

事前に用意された音楽演奏情報(シーケンスや音響データ)をライブ生成する場合であってもセンサ(新楽器)による即興的コントロールが活躍しているし、音楽音響情報をアルゴリズムに従ってライブ生成する「リアルタイム作曲」が主流となった現代、伝統楽器の演奏音響すら事前に録音するのでなくコンサート中にライブサンプリングしつつその場でプロセッシング(音響信号処理)することが普通になった。音楽音響の生成アルゴリズム自体をライブ演奏中に書き換えていく「ライブ・コーディング」における即興性は、音楽の推移や結果を予測できない可能性/危険性すら提起して、大きく注目されている。

1978 年から続くコンピュータ音楽の国際会議 ICMC や関連学会(SMC/NIME)のコンサートセッションはその時代の Computer Music の先端が集うショーケースであるが、過去(1990 年代迄)には所謂「現代音楽」的な音楽が主流であったものの、音楽のライブ性が拡張する流れとともに、例えばコンサートホールの開催だけでなく、クラブやディスコで開催されるコンサートセッション(商業音楽はほぼ皆無)が増え続けるなど、時代の進展とともに音楽ジャンル/スタイルも拡大している。

かつてクラシック音楽の領域で「実験音楽」・「前衛音楽」・「現代音楽」と並び称されていたこのジャンルを「消えゆくもの」と揶揄する専門家もいるが、「現代音楽風の音楽を自動生成する AI」の時代となって、改めて即興的コンピュータ音楽における「現代音楽」の意義を海外でのアプローチなどの事例から考察してみたい。